



一貫コース通信

知の巨人を失う残念さを想い(その2)

夏季休業も半ばを迎え毎日が100%の夏が続いて居るが、その夏に気圧され^{いささか}些^{いささか}疲れが現れる時期を迎えている。良くヒトは気持ち次第と言われるが、私は通信を書く様になってこの方、猛暑の時だからこそその…読書を勧めて来た。この夏も…、読書をしよう。

先月は“安野光雅”先生を取り上げたが、今稿は“立花隆”先生について思う所を^{したた}認めて見たい。立花先生が逝去されたのは4月末で、遅れる事2月後に報道された。このニュースは私にも衝撃だったし、Y新聞は2面を投じ“知の巨人”の敬称で見出しを書いている。また、紙面には高名な学者・作家がそれぞれ追悼として賛辞^{したた}を認めていたので、世間の評価も概ねこうなのだろうと思う次第である。戻るが、私は“司馬遼太郎”先生を主に、角度を違えて“立花隆”先生の著書から学び、昭和・平成を過ごした一人である。又、立花先生の著作は『田中角栄研究』を皮切りに20数冊読んだ(先生は100冊書いているので、僅か4分の1です)と思う。捨てきれなかった単行本(13冊)は腰浜図書館に謹呈したが、文庫数点が家の本棚に残っている。(※裏面)

さて、既に評価が決まって居る立花先生に対し、今更何を書くの…と疑問もあるだろうが、ここは一人のシンパとして許して戴きたい。ただし、一冊の著書でも内容は凄いのので、それを扱う気は毛頭ない事を断って置きたい。初めに確認したいのは、立花先生はジャーナリストにカテゴライズされる事である。従って、事実を忠実に読者に伝える事を旨とし、また、読者もこれを求めた筈だ。しかし、事実の中にはヒトの思惑が見え隠れするのが常で、すぐさま意図たる真実とは何か?の壁に突き当たるのではないだろうか。この事は司馬先生も度々書かれているが、飽くまでも“真実は闇の中”で、Fact(事実)≠Truth(真実)なのである。

実のところ、私が立花先生の著書を読んで惹かれたのは、この前提に対し、如何に事実と真実の齟齬^{そご}を小さくするか…、と言う一貫した姿勢と努力についてだ。著書の中にも、取材の在り方や準備に要する態度がシバシバ出て来るが、それに費やす準備が尋常でない(半端じゃない)のである。例えば、専門家の取材では事前にその人の論文や著書の殆ど読みこなす(目を通す…ではないのです)とか、外国人への取材は出来るだけその人の母国語で行うとかである。後者の場合は、身銭を投じて講師を雇い何週間もマンツーマンで教わり、その言語を使って生活までするのだそう。そうしないと、肝心のところで逃げられてしまう(曖昧にされる)と…書いて居られる。つまり、準備段階の精度^{すべ}が総てで、ここで手を抜くと納得の行かない後悔に繋がる事を繰り返し書いている。

立花先生の著書の知見は新聞を初めとする諸情報の根拠として随分活用させて戴いた。また、対象は何であれ、超一流のインテリゲンチヤールの思考方も勉強になった。そして、肝に銘じたのは一人の作家を評する場合は、最低10冊以上の作品を読まないと言口にする資格すらない事である。こう言う当たり前で基本的な姿勢を、立花先生に教わったと思っている。



※

腰浜図書室に在る立花先生の著書一覧

『サイエンスナウ』・『脳を極める』・『宇宙からの帰還』・『アポロ 13 号奇跡の帰還』

『サイエンスミレニアム』・『臨死体験』・『立花隆のすべて』・『立花隆秘書日記』

『ぼくは、こんな本を読んでいた』・『ぼくが読んだ面白い本、ダメな本…』

『知のソフトウェア』・『精神と物質』。

ちなみに自宅の書棚は

『サル学の現在(上下)』・『アメリカ・ジャーナリズム報告』・『マザーネイチャーズ・トー

ク』・『二十歳のころⅠ』(1937~1958)・『二十歳のころⅡ』(1960~2001)

なお、『田中角栄研究』を初め数点は、引っ越しのどさくさで迷子のため行方不明。